

形式名詞「もの」の文法化に関する認知言語学的考察

佐々 祐子・堀江 薫

東北大学大学院国際文化研究科

{yukos, khorie}@intcul.tohoku.ac.jp

日本語の「もの」という語は、語彙の意味を持つ名詞としての用法と、語彙の意味が薄れ接続助詞や助動詞の一部として機能する形式名詞としての用法を持っており、これらの「もの」の用法は連続していると考えられる。本研究では、このような「もの」の用法の連続性を、語彙の意味を持つ内容語が機能語へ変化していくプロセス、即ち「文法化」という観点から考察し、「もの」の語彙の意味が、その文法化のパターンにどのように関わっているのかを、他の形式名詞「こと」・「ところ」の文法化のパターンと対照することによって明らかにする。

1. はじめに

「もの」という語は、指し示す概念の外延が広く用法も多様である。その用法は、例文(1)・(2)のように、語彙の意味を有する名詞としての用法と、例文(3)・(6)のように、語彙の意味が薄れ接続助詞や助動詞の一部として、文法的意味を有する機能語としての用法の2つに大別できる。

- (1) ものを大切にしましょう。
- (2) これは彼が書いたものです。
- (3) 慌てて出て来たもんで、財布を忘れて来てしまいました。
- (4) すぐに調べればいいものを、面倒がってやらない。
- (5) 買ってはみたものの、一度も着ていない。
- (6) 小さいころはよくこの川で泳いだものです。

例文(1)・(6)の「もの」の用法における語彙の意味と文法的意味の間には、連続性があると考えられる。語彙の意味と文法的意味の間の連続性に関して、これまで国語学や日本語学の分野では、「形式化」という概念を用いて、ある語が本来の語彙の意味を失い文法的意味を有するようになった場合、その語は「形式化」した、というような記述を行ってきた(cf. 寺村1984, 1992, 渡部1995)。しかし、

このような「もの」の「形式化」についての諸研究は、語彙の意味から文法的意味への変化が、どのように、またなぜ起こるのかということを十分に説明していない。

本研究では、「もの」の語彙の意味がどのように文法的意味と関連しているのかを、「文法化(grammaticalization)」という観点から考察する。そして、文法化された表現形式に、「もの」の語彙の意味がどのように関わっているのかを実例によって示す。そのために、「もの」を他の形式名詞「こと」・「ところ」と対照し、日本語話者が「もの」という語をどのように認識しているかを考察する。本研究の構成は以下に示すとおりである。第2節では、文法化の概念を解説する。第3節では、「もの」を含む3つの接続助詞の文法化の程度の違いを論じる。第4節では、文法化した「もの」の意味的、機能的変化を考察する。第5節では、「もの」を「こと」・「ところ」と対照し、それぞれの形式名詞の語彙の意味と文法的意味の連続性を考察し、それぞれの形式名詞の語彙の意味が文法化のパターンにどのように関わっているのかを示す。第6節では、本研究の結論および課題を述べる。

2. 文法化 (grammaticalization)

文法化とは、一般に語彙の意味を持つ内容語

が機能語へ変化していくプロセスをいう(cf. Heine et al. 1991, Hopper and Traugott 1993, Bybee et al. 1994)。文法化の現象の例は、以下に示すとおりである(cf. 山梨1995)。

(7) 学校へいく。

(8) 傘をさしていく。

(9) 花の芽がだんだん大きくなっていく。

例文(7)の「いく」は、“移動”を表す本動詞として用いられている。これに対し、例文(9)の「いく」は「ていく」という形式で動詞に後接する補助動詞の一部として用いられているが、“移動”の意味は薄れており、“事態の進行、または状態の変化”、といったアスペクト的な意味を担っている。なお、例文(8)の「いく」は他の動詞に後接し、補助動詞的に用いられてはいるが、例文(9)の「いく」よりも強く“移動する”という意味が残存している。つまり、例文(7)–(9)を比べると、「いく」という語彙項目の語彙の意味が順番に失われ、文法的意味が強まっていくことが分かる。文法化のプロセスで生じるこのような意味変化は恣意的なものではなく、文法化した語のもとの語彙の意味と密接な関連がある。(cf. Hopper and Traugott 1993)。

### 3. 「ものを」の文法化の度合い

「ものを」・「もので」・「ものの」という形式は、「もの」が文法化され格助詞と結び付くことで接続助詞の一部として機能するようになった文法形式であり、それぞれの形式の文法化の度合いは異なっている。

「ものを」は、例文(10)のように「もの」+格助詞「を」に分解できる場合と、例文(11)のように接続助詞「ものを」として、それ以上分解できない場合の2つに分類できる。例文(10)の「もの」は語彙の意味を有しているのに対し、例文(11)の「もの」は文法形式の一部となり、語彙の意味を失っている。

(10) わたしが作ったものを、子供たちはおいしそうに食べていた。

(11) すぐに起きたら間に合ったものを、ぐずぐずしていたばかりに遅刻してしまった。

「ものを」は、通常、上記の2つの例のように文脈によっていずれの用法であるかが判別できるが、以下に示すように、いずれの用法であるかの判別が困難な場合もある。

(12) 先生でさえ解けないものを、わたしに解けるわけがない。

例文(12)の「もの」は、「もの」+格助詞「を」という解釈と、接続助詞として文法化した「ものを」の両方の解釈が可能である。

このことは、接続助詞の「ものを」がすべての文脈において、「もの」+格助詞「を」という解釈を排除する程には、固定されていないことを示しているように思われる。

一方、「もので」・「ものの」は前述の「ものを」と異なり、如何なる文脈においても「もの」+格助詞と混同されることはない。

(13) 太郎が突然花子をぶったもので、みんな驚いた。

(14) 明日は晴れるものの、気温は低いでしょう。

以上の考察から、同じく「もの」という形式名詞を含む3つの接続助詞「もので」・「ものの」・「ものを」の中で、「もので」・「ものの」は「ものを」よりも接続助詞としての文法化の程度が進んでいることが示された。

### 4. 「もの」を含む接続助詞の2つの変化の方向性

「もの」を含む接続助詞の変化には2つの異なった方向性が見られる。第一の変化の方向は、話者の感情を表すような主観的な方向への意味変化である。この変化の方向性が最も顕著に表れている形式は、「もので」・「ものを」という接続助詞である。

(15) ハイヒールのかかどが折れたもので、遅刻してしまいました。

cf. ハイヒールのかかどが折れたので、遅刻してしまいました。

- (16) それで帰ってくれりゃいいものを、  
その人は私と一緒に帰るのであった。

(蛭子能収『正直エビス』新宿書房、p. 149)

例文(15)の「もので」を含む従属節は、話し手が主観的に推論した事態を述べている。また例文(16)の「ものを」を含む従属節は、主節と反対の事態を述べており、実現してほしいことが実現しなかった場合の話者の不満が表明されている(cf. 佐竹1984)。

もう一つの変化の方向は、接続的機能を持つ付属語が独立語になる方向への変化である。この変化の方向性が最も顕著に表れている形式は「ものの」という接続助詞である。

- (17) 買ってはみたものの、一度も着いていない。(=5)  
(18) 彼は若いとはいうものの、なかなかしっかりしている。  
(19) 絵を描くのが好きです。とはいうものの、最近は時間がなくて描いていません。

例文(17)の「ものの」は、節に後接し接続的機能を持つ付属語である。さらに、「ものの」は、例文(18)のように、引用節を導く発話動詞「言う」と結合して、「～とはいうものの」という接続助詞として機能している。最後に、例文(19)では「とはいうものの」という形式自体が一つの独立した接続詞となり、文頭に現れ、文と文のみならず談話と談話を結び付けるようなテキスト的機能を担っている。

## 5. 「もの」・「こと」・「ところ」の語彙的意味と文法的意味の連続性

「もの」・「こと」・「ところ」は、それぞれ“存在”・“事柄”・“場所”といった中心的意味を持っているが、それぞれの語の意味の周辺部分では、指示対象が重なることがある。その際、話者は指示対象のどの部分に焦点を当てるかによって、それぞれの語を使い分けられていると考えられる。以下の例文(20)－(21')を参照されたい。

- (20) 学校のものを持ち帰らないでください。

- (20') 学校のことを持ち帰らないでください。

- (21) 文章を読んで、分からなかったものにチェックしてきて下さい。

- (21') 文章を読んで、分からなかったところにチェックしてきて下さい。

例文(20)の「もの」は「学校の所有物」を指しているのに対して、例文(20')の「こと」は「学校でする仕事など」を指している。したがって、同一の対象(例. 学校)を指示しながらも、「もの」は、対象を、“時間的概念・動作過程を含まない一定の形あるいは特徴を持っているもの”として見ている場合に用いられ、「こと」は、対象を、“時空間上で起きた出来事、あるいはその動作過程”として見ている場合に用いられる。

一方、例文(21)の「もの」は「文章全体」を指しているのに対して、例文(21')の「ところ」は「文章の一部」を指している。したがって、同一の対象(例. 文章)を指示しながらも、「もの」は、その対象だけに注目し、それを“全体”として捉えている場合に用いられ、「ところ」は、対象を、“全体の中の一部”として見ている場合に用いられる。

以下では、「もの」・「こと」・「ところ」の(語彙的)中心的意味がそれぞれの文法的意味に、どのように反映しているかを考察する。

第一に、「もの」には、4節で見たように、話者の主観を表す方向への意味変化が見られる。このような方向の意味変化は、「ところ」には見られない。

- (22) 彼女が必死に頼むもので、仕方なく一緒に行くことにした。

- (22') \* 彼女が必死に頼むところで、仕方なく一緒に行くことにした。

このような「もの」の、話者の主観を表す意味は、「ところ」との対比で明らかとなった、“対象だけに注目し、(話者が主観的に)それを全体として見る”という「もの」の、言わば「認知的意味」と関連しているのではないかと考えられる。

次に、「ところ」は、格助詞と結合し接続助詞としての機能を有する点では、「もの」と類似している。然しながら、「ところ」は“場所”

という中心的意味から拡張して時間的意味を持つようになり、「事態がおこる状況」を示すことができるのに対して、「もの」にはそのような場所的・時間的意味が欠けている。そのため、以下の例文では「ところ」を「もの」で置き換えることができない。

(23) 最後の問題を解いたところで、ちょうどチャイムが鳴った。

(23')\* 最後の問題を解いたもので、チャイムが鳴った。

最後に、「こと」は展開する事態を時間の流れに沿って捉えるため、節に後接したとき埋め込み文のマーカ―としての機能を果たすことができる。しかし、「もの」にはそのような出来事や動作過程を表す意味がないため、埋め込み文のマーカ―として機能することはできない。

(24) [昨日、地震があった]ことを知っていますか?

(24')\* [昨日、地震があった]ものを知っていますか?

以上の議論を踏まえて、「もの」・「こと」・「ところ」の固有の指示対象相互の関係を図示すると図1のようになる。

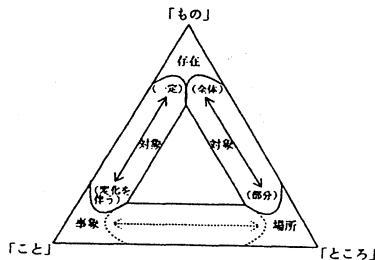


図1.「もの」・「こと」・「ところ」の相関関係

## 6. おわりに

本研究では、「もの」の語彙的意味と文法的意味の間に連続性があるという観点から、「もの」を含む接続助詞の用法を手掛かりに、「もの」の語彙的意味から文法的意味への意

味変化の方向性を探った。また、「もの」・「こと」・「ところ」という語の使い分けが、日本語話者の、対象に対する認識の仕方の違いを反映しているという仮説に基づき、「もの」・「こと」・「ところ」がそれぞれの語彙的意味に基づく固有の指示対象の意味を保持しながら、それぞれの語彙的意味と連続した固有の文法的意味を有していることを示した。

本研究は「もの」の用法の共時的側面を考察するにとどまったため、今後は「もの」の通時的变化を資料に基づいて分析し、「もの」の文法化が日本語のシステム全体の中で果たしている役割を明らかにしていきたい。また、他の言語における「もの」・「こと」・「ところ」に相当する語との対照も今後の課題としたい。

## 引用文献

- 佐竹久仁子(1984). “～もので／～ものの／～ものを.” 日本語学, 10, 89-96.
- 寺村秀夫(1984). 日本語のシンタクスと意味』くろしお出版.
- (1992). “「もの」と「こと」.” 馬淵和夫博士退官記念国語学論集. 大修館書店, 75-93.
- 山梨正明(1995). 認知文法論. ひつじ書房.
- 渡部学(1995). “形式名詞と格助詞の相関—単文と複文をめぐって—.” 複文の研究(上). 仁田 義雄(編). くろしお出版, 27-54.
- Bybee, Joan L. Revere Perkins and William Pagliuca. (1994). The Evolution of Grammar. Chicago: The University of Chicago Press.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi and Friederike Hünemeyer. (1991). Grammaticalization: A conceptual framework. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hopper, Paul. and Elizabeth Traugott. (1993). Grammaticalization. Cambridge: Cambridge University Press.